

デズモンド・モリス著／別宮眞徳監訳

人類と芸術の300万年

アートするサル

ヒトはなぜアートするの
生物種の一つとしてヒトを
か？「人間は誰でも心の
とらえ、キリスト教的人間
奥深くに美的欲求を抱いて
いて、何らかの形でそれを
吐き出したいと願って、人
類の芸術を語るにあたり、
は何か？アートの定義
は、「脳を楽しませるため、
日常的なことから非日常的
なものを作り出すこと」で
ある。——一般にも広く受
け入れられそうなこうした
本書の言説は、たとえば画
家アド・ラインハートによ
る「美術としての美術が美
術としての美術である」と
いう晦渋な美学的言辭とは
位相を異にする。

これは著者のデズモンド
・モリスが画家であること
に加え、動物学者、プロレ
ドキヤスター、著作家の顔
を持つことによるだろう。
自然科学者の態度と、視聽
者や読者に平易に語りかけ
る才能が、八十五歳になっ
て書き始められた本書に知
的さと明解さをもたらした。
た。カラー図版満載の、楽し
い図鑑のような本である。

動物学者としては、ダー
ウィニストであり唯物論者
である。一九六七年のベス
トセラー『裸のサル』は、
た、チンパンジーに絵を描

科学とシュルレアリスムの同居

「アートするサル」という観点
から人類史に併走した美術史

中ザワ ヒデキ

かせる実験。一度だけ、絵
を描くことへの褒美として
餌を与えたところ、絵の質
が劇的に低下したことがあ
った。それを著者は「商業
アートの最悪の見本」と形
容したが、逆に言えば普段
の実験は、給餌という報酬
のみならず、褒めたり励ま
したりさえも行われない厳
密なものだった。人間の子
供とは違って具象画を描く
ことはついになかったが、
チンパンジーが無報酬にも
かかわらず嬉々として創造
的に描画し、好みの色やパ
ターンの展開、作品完成の
判断さえ示したことの意味
は、純粋なアートとして「絵
を描くこと自体が褒美」と
いう事態が現出したことだ
である。

これを、芸術のための芸
術という既存の用語で説明
しないのが、画家としては
シュルレアリストを任じる
著者の流儀だろうか？二
十世紀前半にアート界を覆
ったシュルレアリスムは、
人生のための芸術を掲げて
合理的思考を拒み、美術と
しての美術の域外の非日常
的经验を求めて、アウトサ
イダーアートや子供の絵、
ルネッサンス以前や部族の
アートを称揚した。じつは、
これらの項目に多くのパー
ジ数が割かれていることが
二百万年前の「マカパン
スガットの小石」から直近
のムハンマドの風刺画まで
つづられた、美術中書とし
ての本書の特徴である。こ
の意味では先述の「動物の
アート」という項目を、シュ
ルレアリスムの射程の拡張
ととらえることもできる。
しかしながらどうだろ
う、合理的思考の権化とし

ての科学と、それとは異質
のシュルレアリスムの同居
によって上梓された書物で
ある。芸術のための芸術の
概念を序章では糾弾してお
きながら、部族アートの章
では賞賛目的のフリースト
してうっかり用いている。
そして日本のデコトラや各
国の壁画グラフィティをフ
ォークアートとして紹介
し、人間は誰でも美的欲求
（なかざわ・ひでき氏）美
術家

★デズモンド・モリスは
著作家・プロレドキヤ
スター・動物学者。著書に
「ビジュアル人類猿」「赤
ちゃんの心と体の図鑑」
「マンウォッチング」ほ
か。
★ベック・さだのり氏は
翻訳家・批評家。著書に
「翻訳と批評」「あそび
の哲学」ほか。



A4判変型・320頁・12000円
柘風舎
978-4-86498-020-3